

Title	慶應義塾図書館蔵「浦島太郎」解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2004
Jtitle	三田國文 No.40 (2004. 12) ,p.44- [56]
JaLC DOI	10.14991/002.20041200-0044
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20041200-0044

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾図書館蔵「浦島太郎」解題・翻刻

石川 透

解題

『浦島太郎』は、古来よく知られた話である。その中でも、御伽草子の『浦島太郎』は、現代のお伽噺のものになったと思われる作品である。伝本としては、御伽文庫本が最もよく知られているが、絵巻や奈良絵本も多く存在している。

本書は、『浦島太郎』の伝本としては、画中詞が存在する等、古態を示す善本である。

本書の書誌は以下の通り。

所蔵、慶應義塾図書館

形態、奈良絵本、一冊

時代、「江戸初期」写

寸法、縦一七・一糎、横二六・〇糎

表紙、なし

外題、なし

内題、なし

料紙、斐紙

字高、一三・三糎
奥書、なし

以下に「浦島太郎」を翻刻し、最後に、本文冒頭部分、各挿絵を順番通りに掲載する。

翻刻に当たっては、写本としての趣を残すように勤めたが、読解の便宜のために、句読点・濁点・「」括弧等を補った。ただし、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。また、挿絵に見られるいわゆる画中詞は、二字下げで示した。

【浦島太郎】

抑、むかし、たんこの国、みつのへといふ所に、うらしま太郎と申て、二十はかりなる人有。おりふし、つりをしてそ有ける。なつ、あそひし人、かめをつりあけゝる。

かのうらしま、申やうは、「かめはまんねんと申候へは、御たすけ候へ」と申せとも、「ころすへき」やうを申せは、たからをいたし、かめのいのちをかいたすけ、うみへはなしける。

かゝるおんどくにや、かのうらしま太郎を、かめのみやこ、

ほうらいへつれたして、色々のちんふつ、こくとのくわしにてもてなし、かしつきけり。

〔挿絵・第一図〕

まんねんこうをふるかめのをとひめと、さいあひす。中く、よろつのためてたき事、かすかきりなし。

此女はう、のりければ、ろかいなけれども、はやく行こそふしきなれ。

さるほどに、女はうにつきて行ければ、すなはち、ほうらいさんと申所に、つきにけり。こんぐるりをのへたる所也。道にはめなうをしき、しろかねのついち、こかねのもんをたて、うちへ入て見るに、きんぐをのへたるたいりあり。

此門へ入人は、あつからず、さむからず、年をふれ共、おひもせず。よろつ、心になはす□いふ事なし。かゝるめてたき所に、すこしける。

しかる間、うらしま太郎は、女に心をかけ、ふうふのかたらひをなし、年月をゝくるほとに、をのつから、くげ上らふにそ成にける。

〔挿絵・第二図〕

いかに見候へとも、たゝ、ふるさと、こひしく候。

色々になくさめて、かく月日をゝくるに、ある夕暮に、ふる里の事を思ひ出して、女はうに申けるは、「あまりに久しく、ふる里を見候はねは、ゆかしく候ほとに、いとまを給り候へ。かへりたく候」と申ければ、女はう、おほせらるるやう、「此里へきたりては、又二たひ、ふる里へかへる事、御かへり候共、ふる里は、中く、しんせきたへはてゝ、御御身のゆかりと申入

も、あるましく候そや。御とゝまり候へ」と申されければ、うらしま太郎、申けるは、「何とも候へかし、こひしく候ほとに、たゝ、かへりたく候」よし申。

よに、心くるしく思ひて、「さらは、なくさめ申て、とゝめん」とて、四きのせんすいをそ見せにける。

ひかしおもてをみせければ、せいやうの春のけしき、おもしろからずといふ事なし。まかきのうちに、もゝへのうくひすも、かけには、はるたちあそひ、やうはいたうりの、色々にみちくぬれば、にほひきて、きしのおおやき、いとみたれ、なくやかわつの声すみて、ぬるめる水にかけうつす、月の夕へもいとゝしく、おほろなりけるありさまを、御らんしけるに、この春のおもしろきけしきにも、心とゝまらず。さらは、なつのていをそみせにける。

春のなこりとちり残る、あおはにましろおそさくら、池の藤なみたちわたり、山ぶき水にうつろひて、山ほとゝきす、雲井はるかにをとつれて、さはへにはまこもあやめ草、かけひの水のたえくも、なかれ久しきみつくさの、こすゑくになくせみの、声（も）おりからおもしろや。「何と見候へとも、ふる里の事を思ひいたし候へは、さらく、めにもつき候はず」とて、一しゆ、かくなん、

さ月まつ花たちはなのかをかけは

わかふる里（の）人そこひしき

〔挿絵・第三図〕

何とて、歌につけても、ふるさとのみ、しのはせ給ふそ。あらうたてしや、なふ。

なつのけしきにも、こゝろとゝまらず。こゝろそらにて候也。

「さらは、秋のけしきを御らんし候へ」とて、にしのかたへたちいて、秋のけしきとおほしくて、ひこほし、七夕、あまの川、露けきはかう、あきふく風のをとつれて、たか玉つさをつたへけん。まくらにすたくきりくす、松むしのこゑすみて、しかのなくねもまとをなり。木々のもみちの色々に、にしきをさらすにことならず。「かやうに、よろつ、おもしろき事共候へとも、たゝ、ふる里へこそかへりたく候へ」と申ける。

〔挿絵・第四図〕

いつのまに秋はきぬらんおほつかな

きのふとそみる春のかりかね

「秋のけしきにも、御こゝろとゝまらずは、さらは、北おもてを御らんせよ」とて、見せ候へは、冬のけしきとうち見えて、花のしら露たにこほり、あられ玉ちる冬の夜に、つかはぬをしの一はをは、池のこほりととちさせて、まかきのうちのしら菊の、うつろふ色はあはれなり。「何と見候へとも、たゝ、ふるさとへ、くたり申たくこそ候へ」。

〔挿絵・第五図〕

かやうに、色々、おもしろき四きのせんすいをみせ候へ共、うらしま太郎は、「ふる里へかへりたく御入候」と申、うちふしければ、「さらは、いとまを参らせんするそや。御かへりあれ」と申ければ、そのとき、うらしま太郎、よろこひて、おきあかりければ、女はう、心に思ひけるは、「いくちとせ共なく、契て、今さら、はなれたてまつらむ事の、うらめしさよ」とて、なみ

たをなかし、「さらは、明かたのはこをまいらせん」とて、玉てはこをいたして、申けるは、「かまへてく、此はこのふたを、あけさせ給ふ(な)」とて、うらしま太郎に、玉てはこをそいたしける。

「かやうに、ふる里をしのひて、まかり候共、又、やかて、参り候はんする」とて、ほうらいの舟にのりて、いてにけり。かなしみて、かなしさのあまりにや、なくくはまへたちいて、一しゆ、かくなん、

こひしさにはまちをさしていてぬれば

なをとをさかるふねそこひしき

〔挿絵・第六図〕

一、「あのあお山の、あなたをさして行候へ。ふるさとは、ほとちかくみえ候はんするそや」

二、「百りをへてたるうみなり共、たゝ、一ときに行ふねにて候そや。あらく、御なこりおしの、うらしま太郎や、なふく」

〔挿絵・第七図〕

三、「おもひわすれ給ひて、又いらせ給へ」

四、「かやうに、ふる里をしのひて行候とも、やかて又、参り候はんするそや。さのみ、なけき給ひそ」

さるほとに、うらしま太郎は、ふる里へかへりてみれば、けに、ほうらいにて、女はうのいひしごとく、しんせきたえ、あさましく候そや。むかしにかはらぬ物とは、けうしゆの月かけ、松かせのふくをとならては、いにしへに、かはらぬものはなかりけり。または、わかおやこのゆかりとては、見しりたる

人もなし。たゞ、あきればてゝそまよひけり。

さりながら、まつ、此あまのときまにたちよりて、「これなる御としよりに、たつね申へきしきひ候。もし、うらしま太郎の事、しろしめされて候か」と、たつね候へは、「それは、大むかし的事」とて、わらひける。

「あまの子にて候ほとに、さほとのむかし事にては、候ましく候そや」。

〔挿絵・第八図〕

一、「たうり物いはず、春いくはくか、くれにしゑんか、あとならん」。

二、「おうち、こたへていはく、「うらしまの事、おほせ候は、まことしからぬ事を、うけ給候物かな。おうちかたいたいには、さやうの事、うけ給候はず」。

三、「うは、こたへて申やう、「あらく、うつゝなの事、おほせ候物かな。わらはかむまれて、ことし九十九になり候うはにて候へとも、うらしまといふ人は、しらすや」。

〔挿絵・第九図〕

四、「おうち、又、こたへていはく、「あら、おもしろや、なふく。うらしまの事、おうちかひほたちにて候し人の、むかしものかたりにせられ候をこそ、おさなまゝにうけ給候へ。もしく、てんくうなどの、はけておはします事ぞ」。

五、「けにく、さる事の候そや。うらしまの事、このおきにて、つりをするとして、うせたとこそ、うけ給候へ。その事にて候はゞ、六七せんねんにもなるらん。まことしからぬ事かな」。

〔挿絵第十図〕

六、「あら、うつくしのうらしま太郎や。いまた、とし二十はかりにてそあるらん」。

七、「おをよるうは、申やう、「その事にてましまさは、もし、ふしのくすりなどを、御まいり候か。ちと、うはに給り候へかし。いま一と、わかくなりたく候そや」。

八、「おうち、申は、「そのはこのうちに、ふしのくすりそ御さあるらん。あけて、おうちやうはに給り候へ。いま一と、わかくなり申たく候そや」。

〔挿絵・第十一図〕

さるほとに、うらしま太郎は、うらくまはりて、たつね給へ共、ゆかりと申人もなし。たゞ、はうせんとあきればてゝ、物うちあんして、ゐ給ひける。「いまは、此はこのうち、こひしく候。あけてみはや」とて、たゞ、みねふりしてそあたりける。又、あれなる木かけにたちより、なくよりほかの事そなき。

さて、あるへきにあらされは、「此はこのうちに、いかなるたからも有けるを、われに見せしとて、女、「あけへからず」と申ける」と思ひて、「いまは、何か、くるしかるへき。『たからは、身のさしあはせ』と、申事の有ぬるぞ。あけたりとも、何かくるしかるへき」とて、あるこかけにたちより、はこのふたをあけんとしけるか、「いかゞ」と思ひけれ共、こらへかねて、明ければ、たゞ、心ほそきけふり、三すちちちて、かほにあたりければ、にはかに、かほにししかひのなみをたゞみ、こしは、二へにかゝみて、はくはつとしたるせうにそ成にける。

「こは、そも、いかなるはかり事そや」とて、たえ入にけり。

「あら、うらめしや。こしいたや。二へにはしくるそや。たえ入そや。まろふそや、なふ」。

きたるかふりも、ふるゑほしとなり、きたりしひたゝれも、ふるはかまとなる事の、かなしきよ。いまあけて、くやしき、たまてはこ、たゝうらめしきに、一しゆ、かくなん、

つもりぬる年のこもるをしらすして

いまさらあけてくやしかりけり

〔挿絵・第十二図〕

かゝりけるところに、しゆきやうしやのしゆせうなる人、とをりあはせけるか、このよし、つくくゝとまほりて、「ふしきやな、たゝ今まで、いつくしく、わか、はなやかにありつる人の、にはかにとしのより、をとろへたまふ事のふしきさよ。はこのうちより、けふり

〔挿絵・第十三図〕

三すちたちけるは、こは、そも、いかなる事そや、ふしきさよ」と、申はかりもなく候。

さるほとに、うらしま太郎は、はこのもをたちさらて、やかに、たへかねて、しにければ、しやうにん、このよし、御らんして、「につほんこくを、しゆきやうして、めくる身にてあれ共、かやうなるふしきの事は、いまたはしめてあり」とて、里人をちかつけて、せんたんのたきゝにつみこめて、むしやうのけふりとなし、ねんふつ申。

又、おいとつて、かたにかけ、しよこくをしゆきやうして、

「うらしま太郎は、たゝいまのやうなれとも、ほうらいさんにて、七せんざいをゝくりける。はこのうちに、ねんくゝの年を

取入てをきぬるを、夢にもしらすして、あけぬるによつて、「うらしまか、あけてくやしき玉てはこ」と、申つたへけるとかや」。

おいのけふりは、やかて、ほうらいへそかへる。女ほう、此よし、みるよりも、「さしも、『なあけそ』といひし、はこのふたをあけゝる事の、かなしきよ」と、「いまははや、

〔挿絵・第十四図〕

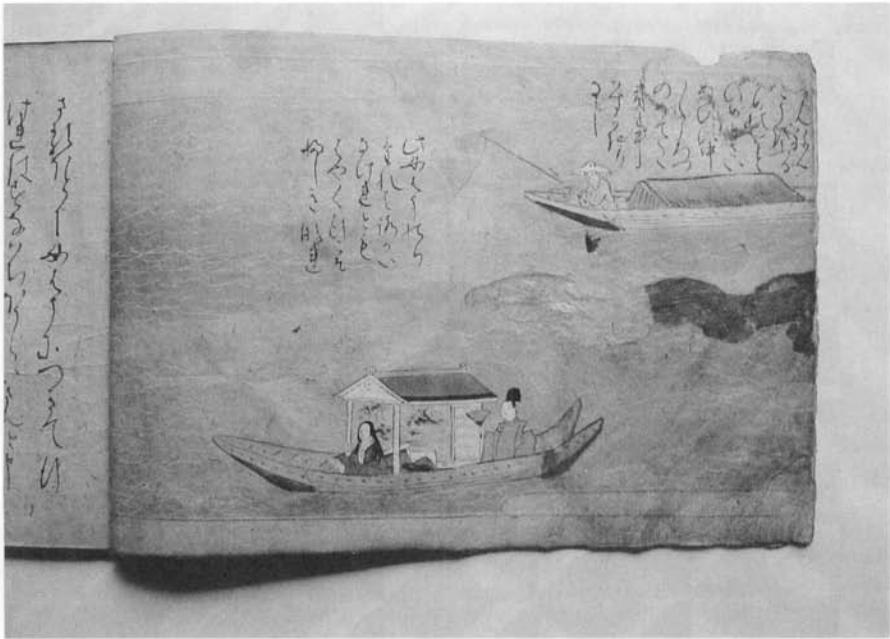
世かすゑになりけるそや」。せめて、しまのうへにあかりて、おいのけふりをなかめて、なみたをそなかしける。

されは、うらしま太郎は、七せんざいをへたる人なれば、「にんけんには、かゝるよはひ久しき人なし」とて、やかて、そのざいしよに、神といはるこめて、うらしまのみやうしんと申けるとかや。これを、御さんけいの人々は、しゆみやう、ちやうをんなるへし。

いのちをなかく御ねかひ候はんかたゝは、此みやうしんへ御参候て、御せいあるへく候。今とても、うたかひあるへからす候也。めてたき物語にて候らいける。

〔挿絵・第十五図〕

柝じくしんお國ういのや
 ン前よりと國らとよて共
 さらめく人むぢゆゆけり
 去をみりけるういあひし
 人あつてちきふれう
 とゆりやはらざんよん
 してあひしむとてし給
 しろとつさゆとゆりや
 そとつさゆとゆれいのら
 なつてつさゆとゆれいのら
 とゆれいのらとゆれいのら
 ちとゆれいのらとゆれいのら
 ちとゆれいのらとゆれいのら
 ちとゆれいのらとゆれいのら
 ちとゆれいのらとゆれいのら



舟
 水
 山
 屋

